

「夏の日のもーフィアス」

30期 前田未智人

彼の名はもーフィアス。愛すべき、憎むべき、つまり我が30期で随一憎めない奴だ。

教え子である34期男子どもが同期のCDなんざを作っていたが、甘い。僕らは、そう、何を血迷ったかもーフィアスの写真集をつかったのだ。あの嬉しそうな顔…(回想)。

そんなイジられて輝くもーフィアス。でも、彼にも一つ、大きな悩みがあったのだ。というも彼は地黒であった。

そのことをイジると彼は大いに怒り出す。なので肌の色のことは同期でもタブー視しつつ裏で密かにイジるといふ、紳士的な対応をとることにした。

夏のある日。夏練の真ただ中。炎天下のプールサイドは蒸し返るように熱い。それもその筈、屋上のプールには太陽の日光がダイレクトに入射してくるからだ。

肌が焼ける、焼ける。この時期は黒こげに焼けた部員であふれかえる。中でも群を抜いて小麦色の肌だったのは…

同期の馬場やんだった。

「うわッ馬場やんすげー焼けてね?!

「マジだ!!」

「これもーフィアスより黒いんじゃないかね?」

「ホントだな!!」

馬場やんを静かに見つめるもーフィアス。自分より黒くなった同期に何かを問いかけるような淋しげな眼差し。

ともあれ、これで彼も悩みを抱えずに済むだろう。そんな昼下がりに

「そういや、もーフィアスどこ行った?」

「どこにもいねーな」

「あれは?!」

そう、もーフィアスはプールサイドでせつせと肌を焼いていたのでした。

「パンツ」

32期 匿名希望

彼の本名は柴田勇。水泳部の二世スイマーの一人である。しかし、彼のことを本名で呼ぶ輩など一人もいまい。彼がどうしてあんな名前で呼ばれるようになってしまったのか。ここで振り返ってみよう。

かつて青山ベストに名を轟かせるほど、彼は屈強なスイマーであった。それゆえ、水着にも気配りの余念はない。

「今日の練習は、このキャップだな。」

その日もきつとそんな思いであったのだろう。彼は颯爽とプールサイドに現れた。自信に満ちた表情と、真新しいキャップと共に。

だが、何かおかしい。何か不可解なオーラが彼の頭から四方八方に放たれている。何かが違う。自分らのしている水泳キャップと、彼のそれは決定的に違うものがあるということ。静まり返るプールサイド。その時、30期のある先輩の一言が沈黙を破る…。

「なんかお前、パンツ被ってるみたいだな。」

それもその筈。頭の大きさに対し、ビロップビロに伸びた水泳キャップは、さながら白ブリーフを頭に被っているようであったのだ。

そのささいな一言が数年後…。

「おいパンツ!!」

「あ!パンツ先輩!」

「パンツさん、チィ〜ス。」

というわけで、今も昔も柴田氏は先輩・後輩問わず「パンツ」で見事に定着してしまっている。

「パンツ」呼ばわりされても(あまり)怒らない、それがパンツクオリティなのだ。